

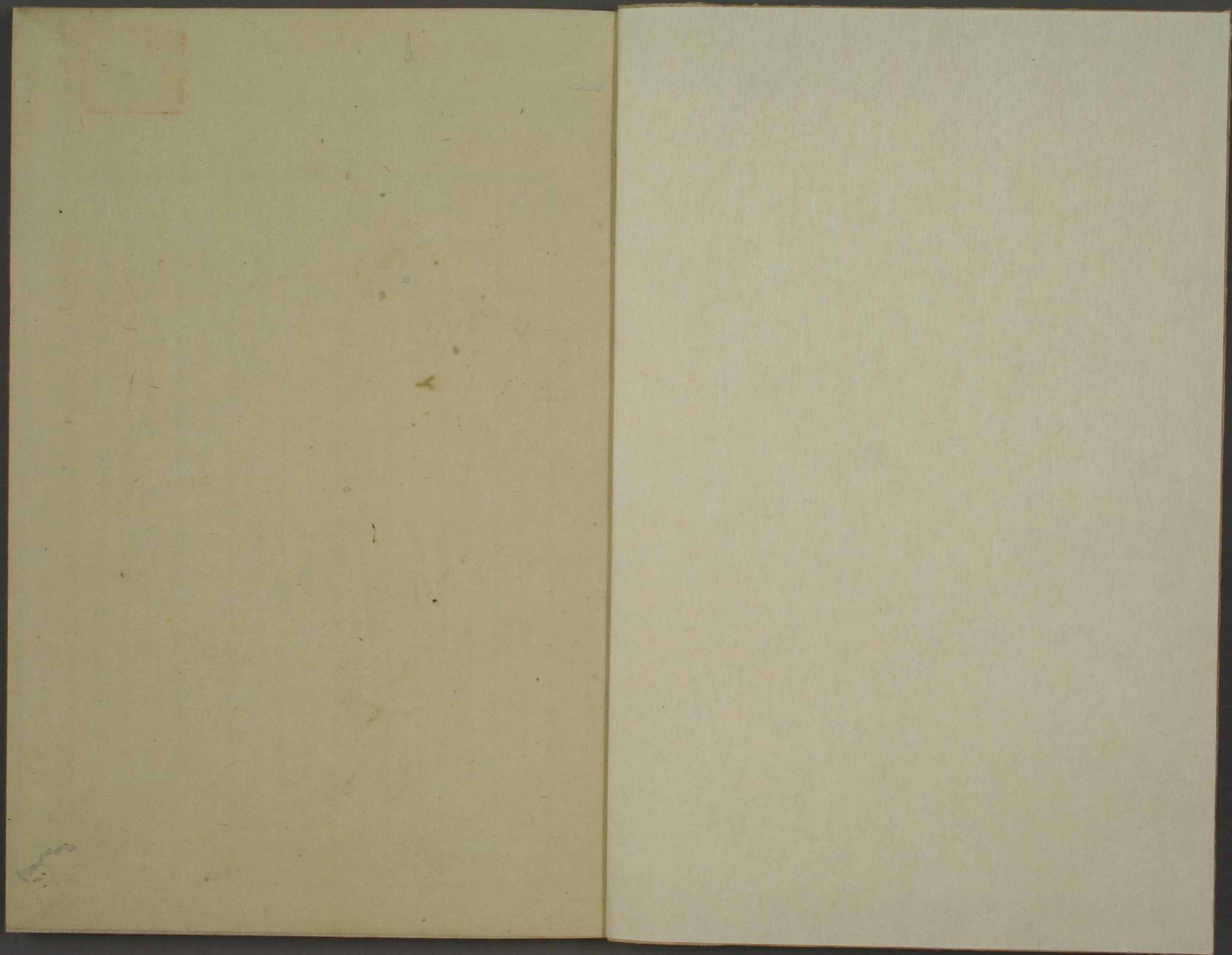


八代傳第九集
桂寛評
下中編

万六回ヨリ
万回ヨリ

100
86
曾 4





門 4 善 4
番 600
卷 86



ハ大侍九辨下帳之下備五評再答

五評右帳のときと左帳の年、評迄ありて成

年、そのころのちりちり、そのころの、お尋ねに假

中、中ハまふ月、そのころの、そのころの、そのころの、

そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、

そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、

そのころの

そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、

そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、

そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、そのころの、

ハム

うつしきりて、清静なまけくあかたきなり
とわさうしきりて、清静なまけくあかたきなり

清静なまけくあかたきなり
清静なまけくあかたきなり

地上の風波、明人の行ふことなり

世上の風波、不平 唐六如の 世路の波、今更なり 文徴明の

け二句ハ是序、地上の風波と云々の行ふことなり

飛りてくる

ふんふん

ふんふん

三國志

ふんふん

其角ニ

ふんふん

ふん

親を情と云ふ者、反對なり

清静なまけくあかたきなり

世六のふんふん

ふんふん

ゆきをそくそくを隠せり志をこころに
一は長心知るべき清一矣一清を
けい一入を味ふより車つこ

行童の出没不測と語ら画き

揚舟の画唐の換骨のう一始々の竹の画
唐のうゑの南雑稿のうをわらわをわらわ
このあふねとつらきとをわらわの怪
法をあふのうの癖ありてとく怪法
心とまのうのうて唐の一件の志
帝ありてけい一件のうをわらわをひら

この一癖の一笑一日本僧定心
行童の出没不測と語ら画き

この一癖の癖をわらわの解

この一癖の癖をわらわの解

清花のうをわらわの日本僧定心
この一癖の癖をわらわの解
この一癖の癖をわらわの解
この一癖の癖をわらわの解

まつらんとせよ... 松橋と家おわり

桂香

二

著作堂大人

八女傳九輯下帳之下上編略評
先口画よりまゝ商人と足利成氏山内成定扇谷定正
あとのいてゝあゝこれ前編
又糸口をひらきまゝの大軍の押よせくる時八女とあ
ひくゝと切あゝんゝそのあるへゝその次ゝ七人の女を
ひらきまゝに瀆すておぼするゝ八女士の後あゝせんとする
うゝめ配遇のあゝそのとみゆ七人の姫君のこといふ七
二回小ほのめされゝまゝとば糸の趣向いらゝとも擁
作者の胸中より小天竺ありとみえて天機凡眼より
うゝらゝ

八女傳

八女傳九輯下帳之下上編略評
先口画よりまゝ商人と足利成氏山内成定扇谷定正
あとのいてゝあゝこれ前編
又糸口をひらきまゝの大軍の押よせくる時八女とあ
ひくゝと切あゝんゝそのあるへゝその次ゝ七人の女を
ひらきまゝに瀆すておぼするゝ八女士の後あゝせんとする
うゝめ配遇のあゝそのとみゆ七人の姫君のこといふ七
二回小ほのめされゝまゝとば糸の趣向いらゝとも擁
作者の胸中より小天竺ありとみえて天機凡眼より
うゝらゝ

ま

二四五九庸
是非二反

作はたかき
細評なるに
たのしみ
其のまじり

本傳出像の人物充満と云ひあることあるはくはくとは
らましく傳甚る意をやくより意深きものごとく出像
よは甚ふゆ意をて本書の光をくめするまよひけるおち
くこさびの出像もいふとおのへるあり先大井川
の必まき京より入りものともなき名所なるくく収
と大井川あどハ写すの必もあなく人くもよくみか
れされいそのふくくてくくまふくきものあり又備後
三郎の像をハ画工の難かきねと標の本の文字天草の
草草まあり一天草とよめて人物甚公之よてハ甚く
ろよりすめよさくまり可嘆く

物評

穩きま
作古の用を
存存

同文中ハ花をさるハ実を地のをす実を喰むハ花をもみ
のめりさくの文句世上のさまふもよくうかひて物評
く

百二十六回

準備の酒盃よていよく訝る胸あうく文か今の上
るもあることよてまよせま^たき等わひもせて末の刺ま
も後日のさままよせまのれりといふへ

権威をくめすまきみよせきことめらる秋の水くいつも
なうく文の執かきてくくうまひこと
この疑を親まきうるときにす後ハ觀音寺城のことある

観深評
ゆきとう

好評

好評

をほのめらされしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
風いそめてしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
さとりしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
かゝるいそむき中よも支四節り前篇ぬけりけの
ことこの篇をよきしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
ことく後の片貝よよくをまりゆく後五一事あ全
なり
木牌の幸よのこりしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
は審事をつくる片貝よありゆく後九基業あきて
志るも無理あくる事自然のことしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
後水滸傳中

穩書

地吉風は
明人の評
又まきま
の巻とて
るべし

燕青ら帝の金よとらりまことなりぬるをとひなるは
これは似しる趨向あるを基めてしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
乃一便の趨向いあふそまきりてゆきしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
七個の義見あへへの波息又大母の女流のむねせり
てあといひことまきりてゆきしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
うれしるい例のぬけめあ
終の文句は地上の風波いさく兼好れ歌のむねけあり
てめてしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
は一回改の志しるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
おちく字のむねあきしるい例の實をうらうらはぬ他志の御家
先略せ

あらび評
絶てり

あらび評
絶てり
下

一大趣向の忽然と何れをもちりて事不詳なり
是輕雅もふどの小款はまよひて「」の出入のゆるりせよ
あるごとく世よまあり実情をうらちえり
絶二六三書事一をほひまま小小少少りり趣向いつきこと
もあくこれとも心をさくげよきいもさくも余情ふり
小文吾り馬かの館よて品七小秘事を少とる候の反對
ともいへへ又親き来りば館よとめおるり一葉も小文吾り
馬かの館よとめおるりの對ありへ
徳用の政元はあみ何ること業即よてこのゆき親
多束をとめおるもむ業即之徳用の僧は似つららり

好評

評
見巧米

ぬ所あるも生立のつ辰をとらまはるりて事自然はあらる
こと一又関白持返公ら御遊の時聞評のさまよ家物次
殿下のより合のおもつけありていとよ一
度牒のことをこわくまくるも今の世の出家のさまより
あるを祇諫は似て昔のおもあらりもあり評き
新西等を退ける我慢のふるまひも亦其編のそを尾
この回よて分めあるは意那の趣向くくみもさらり
感心く
法然親鸞日蓮の三名僧すら弘法のよあらくもあらる
一之名僧の派はあらるも天よりみる時はいらありん
又

評評
り人の
正

罪せられしう天理は叶へりや教免ありしう天理はあ
いさるれ者も疑念あるへりよりて徳用の之をへるのよ
出されしるの表は戲裏の味あるのこころありし
らまして一嘆あり

百三十八回

政元徳法をこのむこと益といふ事と自覚その意
文即は所をまていとめてししこころは徳志の足解
うきをみるよふれり又徳用は徳言もちひられぬを寛
仁大度ありしありも事まよせられり
徳用は徳うち一聞禪あるへりおのひしよそのまむる

徳當

徳當

くうへる趣向^新て金情ふりし趣意を先キへのこするを
大徳の手段に
備後三屏の一大趣向の上も評しりび一大趣向
くはしし評せんいしししこれらこの編中の
ひとつの大関目といふへり

好評

紀二つ親系は面會せざるも意味ふりし儀のあそ
いとくみよて秘意あり
候目のこる漆盒はあといへる文句も例のこまやうして
うまいこと評の味はあきるへり

贅言は似しれともさしと已後をたしあむる親系あり

あつたる者
律をたふ
下但献帝
衣帯の詔
書さむを
与れし孫を
珍重

中別作志の用心創のぬけのあし

難書のよめし人もよくあつたよく人もつらひある

しるふ難書といふことは妙奇しめてめを驚かせる

こつ小難後あり五書ハ人傳あまハ書きてくれ

そつをそつ後ぬけて酒書として湯氣よてその封ぬ

ましるよりしてそを大紳よあるよつけておのつ

くつ文字河をそそ超向又解酒の思對といひて

自覚よいてしるることく妙の妙よて解の秘傳をあ

まんし酒の妙は碎くち寸演義之国志中一衣

帯詔をうくる後一大超向してわらぬ意あり

この一後そのおもつけありて一後の新奇めてし
め傳し

終の文は新奇よて人意表よいつてお作志の自賛

もうへありうべなりしれつ天下よそしるのつらん

感後

百二十九回

龍陽の一件先与四郎よときいささせしるハ後の志

そめよて意味ふりし山中一夕話の故事も一寸つらひ

えりし京河は男色の釣るしことよてときいさされ

しるよてらのうるし一の兒の一件までも自覚のこと

伏線
評し
評し
然るも
あつた

如評

久保が子雨
作は容易の
久保が子雨
久保が子雨
久保が子雨
久保が子雨
久保が子雨

くよまゆ

経二六を思文はちあみあるものよせまゝなるもよ
さかなくてはちと役うすきうらうらも例のぬけのあ
うのクウ不の宿あうてまゝの文靴かうまゝこと
親と来々餅をひくきその皮を物子はくいせまる趣向
是乃玄之のこらす自くいむも殺は京情あつくあ
るもちひあまはくは下もいりそとて物子とおもひつうま
ころハハ大士は縁ありていとよまゝくらゐ看友にい
つゝよみすすすへー是眼まハ一の関目といといとめ
ていらくおひり

見巧者

穩当

活人剣殺
人剣の禅
録とわう

試撃の場の各のいてころその外或は意の決りあると
いとものくくしてよまゝこのあまゝの記事はひとく
あて場あまゝの看友はうらくとよむへりまこと記事ハ中く
まゝいこゝして他志の苦心ふうはへー二は松山城介ハ
うねてある人の名これらを一すいされらるもよ
人殺人の名目もおひり
白粉をつみくまゝの事ハ水餅付のおひりありて
志らもあ餅のかすをあらめす一辰の趣ありていとめて
いゝ〜終の文句よかのこまゝとあといふ文句のあるも
新あへ

親を承り小石をほくところよきも用心いとよくこれ他志
の妙筆こまことふぬくりあきく手配あるうか

好評

的ハ死物も一て一寸のまををつくぬくハあかく敵を
ふすハうきとこの妙論これ所謂中の説この境を
看破せざる人の麻も死物といふへ

好評

運鉢の事ハ西のまてあるふはありともきりり孤凍の
意いとめていし

見物
は
あり

親を情々誤絶まで序をさしせハ誤絶もむくよふら
す一ふあ全うていとめていし序の身を傷らさ

好評
妙

るよ人のあつさるは意あり一わりのハ他志のとら
まする中文のこと一そもこの一版ハ水滸傳乃うち
花^良良ハ序を射る版のおのりありふ粉のことハ
ゆとりあるハ水滸の趣向を一時させらるる他志の
まらきいあてもあかく大士射蔭の妙をあからせ
るあこり場是までみくねハこの一糸あもめてきか
うハ水滸傳ハ後ハ燕青ハ序をいふ版ありこれハ水滸
の本文ハ阿多とく英面から返く落命一して友を
うしああ^の東はなりようてこの序をいこまきす
身を傷らさるハ他志の用心一大趣向へらくてこ

八丈具足の甚まはあまにの字ももうあひてことふ
めつゝゝゝ

徳用との聞漳のさまはこゝろよくして着友おちの
するところなり前回は夜討のむかゝりありこの
ところよむをおろくせんもよていめてゝゝ仙丹
又も用よゝろこと業布之徳用ハ水餅傳の魯知
深は似まことおもむきいことのおよゝろゝこととむ珍重
こゝ
大にをいんのこのことよとりをさるゝる滑物也
たゝらきおのゝろ

見巧ま

三回

舟渡

舟渡
舟渡
舟渡
舟渡

徳しゆんを
未まのま
まのま
まのま

見巧ま

見巧ま

庭のね楓をみせん澆茶をすしめんあとその比の時
よくうあへり
改えろ胃色のこゝろよ付て親事情をとめんとすろ
向そのこゝろの時向よよくうあへり前回は
おつろして解帳ふろ
終のこゝろ和漢よ秀ゝゝも碓碓容易
見すくゝゝゝ氷炭の字
も下ゝゝゝ

百四十一回

こゝ小丹波の国と一轉の物語業布までめをおとろ

十

穏当

うゝとるとうろよ某よいつてハ又もふうゝるさそく
自在自在妙々あるうか

鳥佛師の名をいさされしものもさきまてあむやと

のうもいとよき出しものも興ハ興為同して別凡あま

ハ虎の縁ありけり兔子ハ於兔子て虎の身名先虎の

糸は然然としくとりくめて

興ハ於兔子ハ邦漢まで人情まじりたるも病者よりて

懺悔の一辰よく人情をうらちえり世よこのお

いとあやしく熟する路もわけまらぬと像音人のさ

まめよみるやうなり鬼毛の尖よまき芳お丹楓のちよ

穏当

見方

見方

この画馬の

近世の怪談辨

のまうとまう

大なるものを

のまうとまう

大なるものを

二十コノ由来ヲ詳ニ
セスコノ名画ノ出所
イッレヨリトモサダ
カナラヌガ則チ妖
怪ノ由縁意味ヲ
明シ
シ
ハ評文也

小いうときなると例の妙文

達累ねしるさく一寸志することなうけり繪額のおくられ

る見世のさまみるやうよよくうきとられしものうか

金園う馬よよくぬけ出で萩の戸の胡枝をこひ

しといふこと人のよくしれるとさあありこの何の

書よいつてさるやおちえりさ守ついでありさといひ

こてまひる所さといひを了しひある

この虎の名画の一条ハ四十回本平妖傳の美人の

画のことふよく似て題のういまること妙く口画ハ幅中

ハ美人雪吹姫をうきて虎の画をうきぬハ能きもそ

可十ラニカ佛氏
ノ虚ヲ實ニ下リ
テトニカクイフ
人コレ則佛説ミ
ミトニサレハノ事
ヲ又カレザル
既十九ヘシ
百篇

見巧未

起のこともさすりや中性的あふいされぬも餘情ふら
看友の人くこふまのつくおそらくあるへうはむ
因果ものうらひ他者もきこひはあふは斥も又あり
これ勸善懲惡の定數動定がよくあはこきりとろく
因果ものうらひの實際はまこととおもむとよりなり
このまさるところこよりてこの一條の因果ものうらひ
むはる感復く
南洲田玉原寺に一寸滑石を置て耳のつぶくおも
し
滋味よふきさく籍のき吹起せとも胸の火はら
い

乙乃未

例のうまいことせまきもよやと布蒲巻をいもいと
あひろし
嗚呼をむへくより下他者の志西月あふい
みすくすへうをぬ文句こ
百四十二回
巫山の雲いさくの文句例の名文他者よめつらき
文句なるう醜態癡情あつ孤株の志あり花あり実
ありともいふへき文句極き
冥と於鬼子ら捕ふやまきてるちまも討もあるへきところ
なるよそのことさくしてや、時すぎおとこ村を許

便是虎
妝の伏線

宏論
便是虎
回計
あはれ
結局あり

いてゆき——
あまへの頑童のくる趣向——大関目
よて意味ふらくいとめて——
頑童の如情きより下の文句これ他志のま面目よ
く汎疎の意をこめて字句いとくみし世所
古名画古物おをぬする人の癖をいまめさるふ
是利家のことまでも儀飾せられし孫重く是利家
の茶湯よふりし清せまて呉えをさるせ——ことか
まりの——りの中も若ふふむ所ありこのところの
文句少て人のやうなまちひふけ青天白日をのそむ
りことくよて愉快——

蕉のの
余評
あはれ
よき

又

後

汎疎
動機あり

この頑童このまうて——ちきえんもいうんそして拙六
は拙六までういせて頑童をかきけ——おとこを横死させ
又拙六をも横死させき——もせやうあり——もの
うりをちり——と終りをつけ勅機心の筋よくと不
されしるも長言外の意味ふり——
拙六は拙六もて頑童をうつ辰は茶也昂か本工他を
うつ辰の及對あるへ——めて——
版頼のかきおきも似つう——くて新奇——
拙六は稚子を養ひて——のことよふい——あること
これ又汎疎の趣向あり——

穂方

巽々竹林巽風と名を何ふか〜ハせんもいへることく入
とり小いよく五合〜頂髪をの〜盤纏とゆ〜
なりて先批〜六衣裳をうり又虎の画をうけともうけ
又つひよ名画をうらんとする趣向事自然よいて〜
〜ことくす〜もぬれめかく移を〜
又此所まで一寸往用のこととをとき〜それあり
親多情のことふなりて虎の議論を親多情の詞よ
せ〜もめ〜

このころ
旅道あり
里〜も
もの〜

故廟の繪馬のことと字法今昔ありあ〜
やうよええ〜この所の文句みてみれば生も〜

ねん〜
お〜

百四十二回

巽凡その日のつて〜ちいと〜りい〜流ら〜きを
一〜してさ〜むら〜る〜て〜酒落妙〜
虎眼を點することとを辭するいさも〜る〜き〜容易よ
〜らうつま〜き〜お回の辰亥公文〜
らゆ急よ余儀なく点をう〜んと試るよ〜これハか
りわすれ〜〜ハこれ因果の帰するところ餘情
いとふ〜〜さば〜り点うつことをおそれ〜よその点
のらち振よく出〜し〜り〜とて鼻〜りこめ〜せ〜り列小人の情

穂方

徳
當

徳まじまじせまじり

虎の中へ根をおろししきもせぬのさりの周
縁ありし虎ありしそのいつるさう竹山からんとおひ
しふさらしくしてしきもあつしつるさまこれつて
大筆の身殿業ありていとめてしきこれ又この編
中の一大面目なり

奇行あるものい奇禍あり鬼神を侮まじき例の
確論

無凡ら首の鼻首せられしこれおそく首級を鼻
その反對して世實の反對も又奇りて世妙

徳
當
か
な
り
く

徳
當

徳
當
作
計
及

徳
當
ら
な
り
く

悪獸討治の祈禱も改元の後法好よくえ合しり
三塔の大衆のさまもそのしらの討好よく合しり
祿廟堂のこといよの古及是をのよき、汎陳ありよの古及
是をいつまも全市はひとしきものや、苛政虎より酷
しといふこともうまくなあられり

白川山まで虎は傷られし人、不孝不義の毎て好人
一個もなきこれ徳者の大、面目感ふし、ゆゑと
十二神、持のことよりして、虎ありし人、人を傷
て、い徳、まうと、し、くら、甚妙、筆といふ、し、ゆゑと
苛政の約、り、世、上、悪、人、い、お、ろ、く、善、人、い、す、く、あ、き、及

徳書

理くくくくくくくくくく

百四十四回

河を序を水虎といへとうそその比の系事口のさききり
まこといひりんことくよく時代はあつり

親き情々政元の侵をえるところ何よりやらんとおもふもの
かゝる驚きもせてまゝのていらくうちえり

前編の結ぶある詩句のことく親き情の一件ハ演義
之ふ志の関羽のことくふ擬せられしめるいめつじかろゆえ

は走帆といふ馬をつしされしるも驚帆の意はちうく又
赤兎馬漢亭候の印のおりつるをひとつよせられ

徳書

するハ作者のまらきよて妙の妙なりそよ走帆ハ昔

海波の恩対も一候の妙なり

抑え弘建武の礼よりまゝより苛政ハ虎よりもの初を

再意とうまらるあまの文句例の作者の志面目苛

政虎よまきりいれハうる地獄の見れしといふ文外の

館情いぢあるし

新聞の関符をいぢちよこひて豫安序まらる用念を

あす候名さらくとしてよ

郎中ハわら部ハ騎馬をゆるさすまこといふ文句ありて座

上よて走帆の親き情々退出の辰ハ若編富山の

徳書

題名後書

徳守

徳川山

中より

徳守

徳守

徳守

徳守

順の照應までいとめて……をくす紀二六はめく
りあひ扇子は文字……めさせ
川山までめくりあはするも辰をうねてかゝあはるも
事自然のことく……もあく去るもさらく……
て風味あふり……情の関あふる……も例の妙
文句
五虎の事頭書小い……題よくり……
元来五虎の名はこれ画虎の照對……て文節の
妙あり又虎の……みす……
雷吹娘の一件は……も分……後編出板の

徳守

徳守

徳守

時あつて……徳用の名詮自性妙
酒宴の辰……水鳥記……
画のことをあつと用られるも……
香車のゆり……名詮自性……
五虎……親……
これと親……五虎を……
とく……殺生……
へき……

各々
細々

つけてしまひまゝに他志の丈をきき画虎乃
亡ふる前表ともいふへ終の文句は象棋より
云々もよくはらけり

百四十五回

うるいそらりき中又五虎の落共おちもあつら
れらるも例の勸懲をりとする他志の用意感まへ
より自も親まはら虎をうつ辰までくれんの心も
りかりりうとふまうせさりりよ〜うねていひおこ
されきよの老の他志ありせいうる所いうちすておき先
当坊を心かくへき小あて坊に終り〜まつ又虎の

結をつけてらまゝに大筆の所為凡人のおまへき
こと小あ〜れと感振〜

五山の僧の狂句もあ〜り〜又山流のとうありせ
よきことい前編の評もすてよい〜りきこの狂句のう
ちよ人及お害おと祇孫の意もあり且志の標目よ
あ〜りま〜るも親まはら虎の一件よよくえ合〜り〜り妙
秋は藤原高直のことをとられらるこれ他志の老は心勸
懲心をおろそらせぬ師家は感心〜
口をみつ〜りそとつめりて〜柳菰はあ〜ぬとも〜
能るゆり〜

三回志の題
目と巻
のまじり
を押さ
お白も
押さ
せら
神

と口をたつた
なり

丹平

獲吉

いそいで
まると
推量
四年

般若檀をもちひられざるハ妙趣向之般若檀のことハ
左平記よ^一あり^一もあり當之即妙業感心^一
割竹竜を娘ますめんとせむをうし^一このあこりの
文句古上皇のさまふと目よみるや^一
か^一あまて虎の出^一板さあ^一とて仰山あ^一ぬ
うよ^一めい^一ることく^一ことゆ^一味^一あ^一徳用^一いつ^一ま
親多束のち^一又ハ八丈士の^一ちたれのち^一あ^一命^一せ
む^一と^一ね^一て^一あり^一ひ^一よ^一そ^一を^一一^一轉^一て^一虎^一の^一あ^一ふ^一
も^一あ^一く^一落^一命^一さ^一り^一と^一ハ^一業^一作^一して^一め^一を^一起^一う^一せ^一り^一この
虎^一も^一ハ^一佛^一より^一出^一る^一虎^一あ^一れ^一ハ^一法師^一の^一惡^一を^一こ^一ら^一す

心指辨
指の又精
あり

ハ勅徴心のすちもよくとり合せて^一ことよめて^一虎
も^一ま^一す^一一^一役^一あり^一て^一立^一派^一の^一り^一ソ^一く^一一^一丈^一趣^一向^一他^一者
の^一目^一算^一并^一一^一ト^一一^一リ^一の^一遠^一あ^一く^一勅^一徴^一心^一の^一す^一ち^一髪^一の^一こと^一
く^一よ^一壺^一く^一つ^一き^一妙^一く^一又^一妙^一と^一り^一あ^一へ^一
親^一多^一束^一の^一こと^一ハ^一下^一帳^一出^一板^一の^一時^一を^一ま^一ち^一て^一量^一評^一よ^一あ^一よ^一ふ
へ^一一^一さ^一め^一て^一又^一あり^一ろ^一く^一花^一も^一き^一場^一あ^一らん
と^一よ^一め^一一^一み^一ふ^一く^一一^一出^一板^一の^一時^一を^一ま^一ら^一のみ
虎^一を^一み^一び^一れ^一一^一こと^一自^一贊^一ハ^一之^一分^一よ^一あ^一る^一又
これ^一か^一る^一く^一み^一を^一な^一一^一ね^一む^一天^一の^一下^一ひ^一ろ^一一^一とい^一へ^一と
先^一生^一あ^一る^一傳^一ハ^一之^一度^一ハ^一も^一より^一一^一度^一と^一ま^一の^一虎^一ハ^一出

難波集より
つる人死
白面石扇
と云ふ其扇
は其扇
おまや扇の
骨を埋め
ふらふ人
又あるを
しつる
其扇
二年の云々

一 元ま 金瓶梅の附自賛のよ 面談といを
ま 一 一 その時いくく之度もまの虎をいぶさんとハおも
をまこり 一 一 あるへ 一 一 さても越向にあるのありか
ら及川柳魚は二巾めい糸市もこまる扇うねといま句之
糸市の扇の的も二巾めいいらあうん之度の言名実
古来未嘗有乃名他あるうね
白川山いふ柳愛まであうをとりしる旧蹟ある
又もくふ妙他何るゆ奇偶といふへ 一 一 出像ハ
残月何るも猛虎一声山月高といふおもひうけあり
て餘情ふりしこい他者の渾又ふるへ 一 一 春條奇縁

香雪亭
毛骨疎
好歌の妙

のういをふとおのひいし
又さらふうそふく虎の勢が 白川山乃
有ぬの月
先生の所他よく累々花あり実あり遊こま
わうやきいままやうはおやえて感ふかしふと
おもひあられる事あり 糸師の古巻鑑定家
ある大倉好秋ハ吾知己同人話よあよそ世はすく
まうる人の手紙ハ始老人めきて終はわうやく
ゆのこよりて鑑定不熟の輩ハ昔年の出来老の

八大傳着せしヨリ
ヨムア三度年
光スデニセマリテ
俗塵紛々タリ
サレハ評ハ東春
コソトオモヘト成
年ヲアタニスラス
七無志カレカ五
二深ヲシヒテ又ス
テ筆ヲトル
シカリ

出来を得るものゝ画もおかしくことといへりき
これともあらず先生の所徳老て若やき
ゆふよよくあられり世よすくれぬるの妙といふ
〜
着後家内いひあよあはすぬ三葉ももんせ
〜ととろ香友うけことのもろよろ〜き
振子きこれハ世上一統のうけもさそと〜られて
移るあり〜志〜これハ〜いあよはぬこと
〜ハ例の略評〜下落せ〜事ハさそおふらば
〜〜さるをいとをせ〜まの文〜ぬぬをきらせ

予歌ヲ評スル
ニハシク見解ア
リテ他ト異ナリ
先歌ヲ評スル
時リノ歌ノヨキ
トコロヲ先ミシ
ヲ要シ難ハミ
ヤウニセリ作者
ノ苦心ヲアタニ
テ難セントスルハ
愚ノイタリ也
且ニハ愚評ニモ
賞譽言ノミナ
ハハツラヒタルナ
シカト傍人ノ批
評モアラニカド
リノコトワリヨカ
クイフニテニモ
ヨリ難向スヘキ
トコロハ一糸モ
ナシ

おそく幸あらんかし
桂窓
十二月十五日
著作堂先生
玉根下
名序とひなるニケ条
金日比羅松よりせぬる津花を所ら八坂の
塔をいのりめと〜その貴い女を誇り〜その
女ハ昔出雲の大社に縁むすひあり〜女

唐の僧を
 元も釋書
 大徳の僧
 依釋書大
 一
 〇日本の僧定
 心も釋書周
 空の釋書雜
 釋書の釋書を
 五雜俎の釋
 一
 釋あり足堂
 〇日本僧定
 心も釋書周
 空の釋書雜
 釋書の釋書を
 五雜俎の釋
 一

ことしよこと世人のよくりめことよきといつま俗
 説あるへい先生は俗説よきうひゆるう又ハ
 何の書よいていりといふことりあやゆりあや
 〇日本僧渡唐して北國の毒よあこり人漢書を
 くばさるいこと唐のゆと書よあこりや
 僧の名ともゆりいゆその古蹟も伊豆の
 玉やらんよあるやう雜記よあこりめられいを
 みせあこりあやゆりあやゆりあやゆり

〇日本の僧定
 心も釋書周
 空の釋書雜
 釋書の釋書を
 五雜俎の釋
 一
 釋あり足堂
 〇日本僧定
 心も釋書周
 空の釋書雜
 釋書の釋書を
 五雜俎の釋
 一

拙答評餘談附録

桂君雄才敏捷あるる評よのて限るよあゆと就中よの
 一評舊歳月迫り暮の時速に脱稿する年の月よ
 又やれ一其敏速と夫の感心大なるも且その評はた
 ちよの評よらやきく一箇條も難をへたるい何事
 切程琢磨しゆく之折の功を越されはあゆはるい
 丁を少道とゆとも精疎るゆをゆと久くゆく精細るゆ
 るゆと成り易く速く其要領をゆと其甚難ゆと
 あの長評よゆり一唱と歎きの後他細評あり既に
 二の町るゆとあゆり鳴年敏る我あゆの奇才よあゆとも知

青くしつりしつれおは御徳音田のま且妙如く是れを
わらうの成書は 雌音のく ちりつれと 其の具なるも
あれはかゝるくちりしつれは 祥よそかの筆券ふりてんは 此年
教員言ふかありし

第百二十七回里方許は親兵衛の紀二六く謀りて彼
松本とてつちかひの小文吾の馬加の宿所あり品七の和
事とてとの段の反對とありふへー又親兵衛の政えの節は
とちりしつれ一條の小文吾の馬加の宿所とちりしつれの對を
ちりしつれは 城に至るまで許やう透徹の才もあつて
猶この許は 徳増とのちりしつれは 小文吾の馬加大地

常武は柳留せられくく楚囚よとちりしつれと親兵衛
の宿領細川政えは柳留せられくく禁錮ふりて
かりとちりしつれ相如く其の楚囚の何とちりしつれ
千重木自亂の小文吾の政えを愛しつて家をたつて
はりしつれは 常武取役の身をおろし置んふ及び
已う身方のちりしつれは 小文吾從ふくちりしつれは 楚囚
せんと欲するに至りて 又將軍美濃公の始より親兵衛を
春を愛しつて 楚囚の身をおろし置んふ及び
愛しつて 且 伴のちりしつれは 留めしつれは 楚囚の
親兵衛を 善きとちりしつれは 徳用やう 政え及し 楚囚

みりりいんや又ふん厄の解き及ひて小文君のゆりあり、其夜
毛野のこまひより、但し逃脱し、彼難を免れ親共編の
料ともの虎状對面功をゆく、其禮のめさよ、報ひて
舞し別きまよ、まへに相似く相犯とも、則ち
照對の杯百五六十回なる長物語の中、事の相犯る
ありんや相似く、重復するまよ、相似さんより、かたき
ゆく、休との昔か、あまの故より、事よ、吾心を用ひ
しる、毎回報す、十合なるを、看官の目、所五合を、ま
知、目、この、舞の、二合、三合、なるまへに、かたき、人よ
備ん、とを、求ま、あま、その、舞の、評を、書、ま、ま、あ、ま、

異日の用意は、備ふ、め、せ、万、評、の、この、評、なる、ま、ま、あ、ま、
の、ま、い、や、流、一、評、の、評、を、ま、ま、大、化、ま、ま、ひ、か、へ、一、標、を、舞、ま、
稽、ま、ま、あ、ま、を、老、の、舞、ま、ま、一、笑、入、午、笑、
ま、ま、百、四、十二、回、の、昔、の、評、ま、ま、推、六、の、目、を、あ、れ、も、至、意、
ま、ま、あ、ま、猶、作、ま、ま、の、評、ま、ま、あ、ま、推、六、の、名、と、幸、の、列、ま、ま、所、云、
推、者、度、を、獲、ま、ま、を、人、よ、益、ま、ま、れ、ま、見、を、書、ま、ま、あ、ま、
思、ひ、ま、ま、擬、ま、ま、て、他、れ、り、桂、君、の、和、ま、ま、ま、あ、ま、あ、ま、
つ、ま、あ、ま、ま、評、の、評、ま、ま、あ、ま、ま、い、桂、君、の、ま、ま、ま、ま、江、湖、上、の
徳、北、の、雅、俗、看、官、これ、を、書、ま、ま、稀、ま、ま、へ、一、か、る、評、ま、ま、
ま、ま、あ、ま、を、推、ま、ま、一、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、推、六、の、ま、ま、所、と

その編の所ハ樵者の書ヲ相傳ふるや列子を照しく
見ゆや人カ明るべし

又新書の上段不測と實風の画虎の眼と云ふこと
及新録に見れども揚舟の画虎の怪談を換骨奪
胎とせし彼揚舟の画虎のくもの吾隨筆異聞
雜稽の載るるを言及ふべし又新書の
芳洋と云ふ及芳うけを定城と云ふ後世の辨也
よ及や此のありのありの事

新書の妖怪世説不測を四十回本の平妖行と比與
ましく真の妖怪ハくのやうなりと評せしるるを
考ふる

又の平妖行武弁の國を評並に題叙も辨明志
とゆを多く理ありと云われけりよりさうさう
飛鴨もその舊臘下旬の郵書中ハ彼新書に付
その妖怪のむ國の末編のわらわの事と云ふ
いひをこれより傳ふことと評すのや一世上の
その妖怪の辨ハ九輯二十の巻第百四十九回
又評の
解編めく有定の事いふ終くへ一獨桂君の事
ゆれしの特なり

又第百四十二回ハ親兵衛の政元の向ハ答る唐の諸
名画の奇瑰を説く段ハ是本編の大面目なり画

虎出鬘の伏線あるに在りて、桂君の昔方評よあるものも及れまうし、の作共の用、まるとおまうし、ぬ好憎厚
そ、あ、故あるへ、評中、の周目、その、書、で、い、く、し、西
三箇所ありとの人も、予、の、只、これ、を、大、周、目、と、い、ふ、し、
全國、の、画、馬、の、疾、こ、ま、う、の、疾、の、戸、ら、る、胡、枝、を、を、穿、り、し、ま、
俗、説、の、由、を、同、れ、し、傳、の、書、の、文、を、わ、り、し、ま、う、し、
近世の俗説を、引、く、は、た、原、本、の、こ、も、あ、る、と、い、ふ、し、
駕、り、し、ま、う、し、あ、る、を、吾、山、の、聖、林、や、の、排、書、を、う、し、
ま、う、し、ま、う、し、あ、る、し、ま、う、し、あ、る、し、ま、う、し、あ、る、し、
長、き、う、俗、説、解、の、贅、辨、と、い、ふ、し、思、の、こ、に、依

俗説解の予う、う、う、う、時、り、と、い、ふ、し、
よく思ふ、解説あり、諸、説、も、あ、れ、い、ち、う、し、ま、う、し、
易、し、う、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、
ん、も、ち、の、俗、説、の、其、原、故、を、考、え、し、ま、う、し、
あ、る、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、
の、欄、干、の、木、籠、の、在、り、其、五、郎、の、作、り、の、龍、皮、を、
不、忍、の、池、の、水、を、飲、ま、り、の、後、に、鏡、を、の、り、打、り、し、
る、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、
を、う、し、ま、う、し、ま、う、し、ま、う、し、
是、も、た、彼、即、進、傳、の、註、釋、を、考、へ、し、
御、筆、屋、

御多猪の目と即法華の折のく撞くこも撞干よ
那龍四五ありまよ 細工巨く之曰甚五師の徳といひ
時俗の肥説のこ金剛の西馬のこれまもくあつへ
又持まよま金剛の思者むも 異同あり下学集書
巨勢人金剛一條帝時人也官至大判言と
まろせの何と撞まよあやあらんやう金剛のこま
このやうたま西馬まま者若く度外と撞へ
得てこ撞足う本朝水師や巨勢金剛と
孝謙帝の時の人なりゆれり時世懸隔の人を撮
合し一ま一世の人なり作らまの淨福院本とま

る綾足りたの撞まよ飯う唐山大筆の釋史あまた
能本か唐西ありまのこま 理比聖記の茶色もこ
かも七色の洋と漢の茶色ありまを別人とを
へ一とらまを撞まよはれとも洋表の昭禮をま
せとらまを撞まよはれとも
日本の僧 甘國の毒の中り一解茶本と撞其汁を飲
まろせのこまやあまの随筆かろくまを撞まよ
とく同れ一條の撞まよまのま田舎を必答ゆりかま
かまのこまは洋まは件の麻僧の相模の森村の
元攝まの法師や法名を定心といひ事ハ遺は木の

周密の發幸雜藏の不足り雜藏の云嘉嘉定也
僧德明述山得奇菌作糜供衆。毒發僧
行死者數十人。德用至嘗嘗實得免。有日本
僧定心者。姓平氏。日本國京東路。相州行香
縣上守齋光勝寺僧也。至死不汚云云。是を又
謝摩湖の五雜組の載る定心を又言て陳仲子の
風之庵とらり陳仲子の孟子同門の
人なり嘉土なり。此の光勝寺の今も彼上
森子ありぬる五雜組の光を謬る元勝寺の傳り
らの故の世の人の寺の今もわよを云々。讀書の人五
雜組ののこ見て登立千雜藏をらる者の稀なりる

近日名相藏の官医奈須全盛公利の本朝醫政
みこののを裁られり。見勝寺の現住この寺今も山伏
法持の寺なり
ゆれむ。吾寺のなる廉僧のけり。知りて。賢聖の傳り
折るもの。聖護院の官より。つえ。か。い。天龍寺
建りて。定心は。大僧部を。贈り。賜り。けり。この。本朝。医政
ら。う。せ。ま。え。天龍を。授る。歎ひ。あ。の。只。を。本。原。の
條。澤。の。い。と。く。光。勝。寺。の。現。住。の。山。伏。法。印。の。名。は。ま。ま。く
言。盛。名。の。謝。也。云。云。の。一。を。知。る。と。を。ゆ。り。き
件。の。現。住。の。山。伏。の。領。尚。古。の。本。性。の。い。ぬ。る。年。定。心。大
僧。部。の。為。は。大。法。の。て。け。り。は。米。碑。石。を。建。立。の。志

治以下のものも去歳の秋に後醍醐天皇の御筆の折紙にあり
及れども異用雜稿に載せられたるものありしを
又本朝医法に医とあるものありしを
後醍醐子の清れく二部とあるものありしを
又一本のねばるる彼人の本名の庫中より取り出されし
借覽しぬらぬ書得べき思ふ書なれりとのこと
ふもあはれ書異し雜稿の元籍の海島にけられし
用よ又しとく又老人の書なりとの事あるを
又道の用やの書と厭ひ思ふ書なれりとの事
思ふものありしを施されし為の事なれりとの事

さてつまねくも原稿まゝにうれし

この書評も歳次改められし
ついでに脱稿しく旧臘十七日の郵附せられ
一封書大晦日の下晡にまゝに折りし書も
あれも書く書もまを脱れし書の事を知りて
たれし書も及ひし老眼候へしと
寒風を避りし書も書斎の障子あけたりし
此よも果したかゆりし書も
吾も未だの年とて
書評中第一軒是れ

春ももる不も成のるころありて雅信の二男勢の違ぬを
 知りて芳評を熟讀しとてい餘餘の書もてを思
 うるまゝあるまじき歳に十月中旬より十二月の終りまで雨
 降りて及て寒威烈然雪の一夜もやまらば
 今迄むかひ四日の夜ありては雪もあらずゆりたま
 又六日の辰牌よりまうて申雪ありてつたも降らず
 して明曉を待ちてわくく十一日の早天より雪の雪
 日更りのあつて十一日の朝起ゆり日れの雪は雪を
 も尺五寸ありてまのあつて一尺五寸四尺に及ひる
 村の枝のまを折れ竹の倒れゆり折れも雪ありて

初れの十二日のあつてより人も我橋下の路などへ前なる雪を
 掃除しとて半日あつての人かを雪買さらるとゆきま
 掃るる大なる雪をけりて積雪をえのまよありて
 人家のつらりと餘寒の堪えぬの電り水汲奪りてえとの
 るものゝ幸ひありて来客使札のころにけりて終りこの
 掃大を評を稿一果つ知者百貫取のむくひなまのめん
 まれとなくも掃雪を掃雪の白道ありて筆のまのむくひを掃
 脱もあつて速掃ありて一かたは道雪のまのむくひ一時の
 やまのを取むるのまのむくひも掃雪のむくひを掃雪のむくひ
 掃れるとあつてありて掃雪のむくひを掃雪のむくひを掃雪のむくひ

思ふ心は後無雨知音も他の友人も亦く神速に
彦のゆかりも過音もあつて一已に貴賤のあつ
亦細昔年の月よりと聲をかくるもの如し

昔者作堂老先稿

天保十己亥年春正月十三日庚戌晦時 戌の日子稿一果
廿日亦一奇致

桂宮恩大人金綱帳下

降るまゝの先年無状の餘白も、
第四武筆の裏の下、尚春のため、
この建、
汗類々々

